

あらゆる人の幸福を考える

真の仏教と

日本国憲法

の理想

武器を手にして恐れた

我は殺す、相手も痛むと

見えない矢を抜けば

武器を捨て

あらゆるところで、あらゆるひとと

心が安らぐ

最古の経・スッタニパータより



同胞の衝突に嘆き癒せ願る仏陀（石手寺所蔵）

序

今この国は、集団的自衛権を認めた自衛隊の海外武力行使への道を進む。安倍首相は、自衛隊の海外での武力行使が可能となることで、同盟が強化され、抑止力となることを力説する。このことは日本が専守防衛の国ではなくなったことを意味する。

抑止力による積極的平和。つまり、米国がイラク戦争を演出したように、今後は軍事力を誇示することによって国益を世界に広げる国になったのである。

軍事力の歯止めのない世界展開は「侵略」と命名される。大量破壊兵器が存在しないイラク戦争は「侵略」である。

大戦争があつて平和が語られる。

そして、戦争が忘れられるころ戦争が始まる。

お寺にはパゴダがある。そこはビルマ戦線に戦没した県人五千の戦士が祭られている。その創設は戦後30年。多くの戦友が居られて生き残った何十倍の死者を弔っていた。その口癖は「二度と戦争はしてはならない。どんなことがあつてもいけない」であった。いま戦後70年が経ち、戦友は没して集まる人は減り戦争放棄の声は弱まっっていく。

もしもである。もしも戦友（前線体験者）がもう少し長生きしていたら、只今の海外武力行使可能の扉を開くことに命を張って反対





されたであろう。私は供養を任された祭司として、戦没の方々に誠に申し訳なく思う。そこに刻まれる「今も山河慟哭す」のその意味を伝えたいという、その死と苦難と引き換えに得た真理を、いま正に失おうとしていると思われてならない。平和憲法を失えばまたあのような悲惨を経てのみそれは得られる。

なぜなら、釈迦仏陀は釈迦族の滅亡に際して、その苦難の末に仏教を完成した。

その後、アシヨーカ王がインドをより大きな帝国へと統一するが、そのとき王は、「私が殺した人々は何万人もであり、そのなかには優れた人々もいてむごいことをしてしまった」と後悔して先の釈尊の教えを広める。殺戮と悔恨の繰り返しで仏教は世界に広がった。しかしその後、仏教は死後平安の為の教あるいは、万物斉同的空という観念上の諦観教に墮す。

そして、釈尊より二千五百年後、第二次大戦の累々たる屍の惨禍苦悩をへて、戦争放棄が一国の憲法として確立するのは、まるで釈尊の和合僧集団が膨れ上がって国家となったかのようである。ついに釈尊の平和の夢は国家規模となったのである。



成り立ち

武器を手にして恐怖が起こった。相手を傷つければ相手に痛み有り。それを私もまた痛む。

なんと、人々も私と同様に争う。その姿はまるで干上がる池に飛び跳ねる魚のようにつつかり合い奪い合う。

私はそれに耐えきれなくなった。

そして平安なる場所を探し求めた。

この言葉は、実際に人間釈尊が発した言葉である。(仏教入門2・3に詳説)

釈迦の一族は、インドが16国が淘汰されマガダ国に統一される過程で皆殺しにされた。そのとき戦士として釈尊は武器を手にするが、相手の痛みを感じて戦闘ができない。その有り様はギーターのアルジュナが親族を敵にして殺せないのに匹敵する。そして釈迦仏陀は出奔する。その果てに得たのが仏教である



政府の行為によつて再び戦争の惨禍が
起ることのないやうにすることを決意
し、……この憲法を確定する。

DAYS JAPAN 8月号の編集後記に「現代の戦争は、圧倒的な力を誇る攻撃する側と、市民の犠牲者に分けられる。そして戦場は私にとって、腐る体であり、焼けただれる匂いであり、体がぐちゃぐちゃに碎ける姿であり、切断された顔、壁に付着する子どもの髪の毛だった。兵士の死体はめったに出会わない。戦争と呼ばれるものの犠牲者ほとんど市民だった。だから私は自衛に死者が出るからと言う理由で、集団的自衛権に反対するのではない。臆病な兵士は優秀な兵士である。動くものを見ると、確かめもしないですぐに引き金を引く兵士である。それは市民に引き金を引ける兵士である。物影で動いたのが子どもであることを確かめることもなく、そして被害者の姿を一生見なくてすむ者、司令官や政治家の命令で、ミサイルのボタンが押される。自衛隊が10人死ぬ現場では、自衛隊によって100人が殺されるだろう。そのうちの5人は敵の兵士であり、5人は友軍に殺される兵士であり、90人は市民なのだ。集団的自衛権は、確実に日本を殺戮者の国にする。その戦争は、メディアには絶対に流れない、惨憺たる死体が散乱する現場なのだ。広河隆一」とある。私は各地を戦争反省行脚して、沖縄戦の聞き取りでは、那覇から南方への逃避中に家族7人で兄弟4人が殺された話、また元日本兵のラバウル方面での民間爆撃の話、その他の証言やアレンさんや冬の話などからそれを確信するものです。



どこにも平安な場所はなかったが、私は見えない矢を発見した。その矢に突き飛ばされて人々はぶつかり合う。その矢を抜けば、平等平安の境地が来る。・・・人はそれぞれ呼ばれ方は異なるが、人としてはみんな同じである。

仏陀のサンガは、人を区別せずあらゆる人を分け隔てなく受け入れた。国籍、人種、性別、犯罪者、亡命者を問わない。

この仏陀の考えは素晴らしく進歩的である。仏教は自我意識を徹底的に打破する。すなわち、「我こそが」とか「我が一族こそが」とか「我が国こそが」という思い上がりである。その意識は時として他者を傷つける。

釈迦は人間の尊さの平等を説く

恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚し、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しよう…。

時として人間において苦しみや妬みは、相互の平等へ向かわず、蔑視や高慢へと変わる。かつて為政者は国内問題を他国批判に向けて解消したことがないか。残念ながら国内疲弊とナシヨナリズムの台頭はどの国にも当てはまる。中国は反日を宣伝し日本は中国を批判する。しかし現実には存在するのは個々の各人である。各人が戦争を反省して平和へ向かおう。平和とはまず人が人を愛すること、国境、民族を越えて人を愛することであり、その結果として貧困や暴力や格差がなくなることである。他者蔑視と自我慢心は釈迦の最も嫌うことである。釈迦はアウトカースト者のスニータが入団を請うた時「良し」とのみ語った。

あらゆる人間への深い愛情こそが仏教の神髄である。

それは平和を愛する人々を愛するということである。



釈迦仏陀の教え



見えない矢を抜けば、あらゆる人とあらゆる所で和合して楽しい。奪わず捨てず。

釈迦を慕う人々はサンガ・和合僧を形成する。国

王は盗賊に等しい(中村元ゴータマフツタダより)と言われる時代であるか

ら、どこへ逃げようとも徴兵や被害を逃れること

ができない時である(現代でも北朝鮮やウクライナやビルマの奥地など同様)。釈迦は不殺生

などの戒律と質素な生活を約束することで、治外

法権を持つ共同体をつくることに成功した。

理想経百字の偈(大乘仏教の経典)

至福への力ある菩薩は独り平安に耽溺せず、**全ての有情が救われる日を夢見て、人々と苦を共にする。**心に描くことも働きかけも仏陀の智慧を得るなら、行くべき道を正しく選び、欲望を制して、傷害なく苦しみを離れる。一切の苦を除く清浄なる修行を目的とするから、世俗に塗れても戒律を犯えず、自発的に生きる喜びに満ちる。泥に咲く蓮のよう

うに、欲望と罪悪の汚泥に呼吸しながら、それを改変して安楽を咲かせる。……

仏教入門1 経典解説に詳説

理想



全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ
いっしょに行きませんか
ビルマカレン人孤児支援



全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

この憲法はただ者ではない。

これは釈迦仏教や大乘仏教が説くのと同様に説く。
すなわち

全ての有情が救われる日を夢見て、人々と苦を共にする。

この憲法は人類に咲いた救世主である。

日本国憲法



手段

どこを探しても自分より愛しいものを見出さなかった。そのように他の人々にとってもそれぞれの自分が愛しい。ゆえに人を害さない。人を大事にする。

殺し合う人の中で殺さず、奪い合う人の中で奪わず、人々と和して生きる人。その人を私は尊敬する。

釈迦の時代。国家を非戦闘的に行うことは困難だった。だから釈迦は諸国王を説得しながら王権の及ばない共同体をつくった。そして戒律を守る人は全て受け入れた。



アフガン・イラク戦争の時には80カ寺の僧侶牧師も参加して反戦が祈られた

国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。(専守防衛以外の)戦力は保持しない。国の交戦権は認めない。

国民主権が広がり国連や国連憲章がある現代。先制自衛とか国家の生命線とかの屁理屈をやめて専守防衛に徹すること。そういう国を増やすことが平和への道であろう。イラク戦争の失敗は、戦争が戦争を終わらせないことを示している。

ただし、人々が世界の苦難にある人々への共感と惜しみない努力をする必要がある。

「兄弟三人を失った憎い戦争」 大城繁春

昭和十六年十二月八日に日本軍が真珠湾を攻撃し、米・英・蘭に宣戦布告し太平洋戦争が勃発した。小学校四年生だった私は、周囲の大人の会話や先生方の話で戦争が始まったことを知った。当時の私には戦争の恐ろしさを知る余地は微塵もなかった。当時はテレビ、ラジオなどは無く、大人の会話が唯一のニュースであった。日本軍がグアム島の占領をはじめ、ウエーキ島、マニラと次々に占領していったとの話を学校で聞き、日本は強い国だと誇らしげに思った。学校では占領のニュースがある度に全校生徒が旗行列して、戦勝ムードに湧き返った。・・・

日本近海には敵国の潜水艦が出没し食料や生活用品が日増しに苦しくなり、非常時の到来となった。・・・

慌てふためいて、食料品を全員に分割して、南部への避難に出発した。具志頭村までは、無数の避難民が、道一杯に何キロも続いた。そこには米兵による爆撃はなく、まさに嵐の前の静けさであった。しかし、前述した通り、米兵は前線部隊の援護射撃のため南部一帯に鉄の爆風を巻き起こしていた。それを知らず、多くの住民は、弾丸の中を彷徨った。道路の周辺には、無数の生々しい死体、助けを求める者、うめき声、爆風で吹き飛ばされ木にぶら下がった血だらけの死体が散らばっていた。まさに生き地獄とは、こんな悲惨な状況のことであろう。その異様な情景は文字では表現できないし、また思い出したくない。

私達家族は弾丸の中をくぐり抜けて米順まで辿り着いた。そこも鼠一匹残さぬ爆撃があった。避難する場所もなく、爆風や破片を避けるため凹地や家畜小屋の焼け跡の石囲いの中に、二、三家族が避難した。そんな所に直撃に遭い死者や怪我人が続出した。そんな不幸がいつ降りかかってくるのか毎日が不安であった。先刻までの猛爆撃も静まり

返った時、大城良春君が母の怪我で助けを求めてきた。私の兄が助けに行こうと外に出たら、数百メートル近くまで、米兵が進撃してくるのを発見した。助ける余裕もなく私達は後ろ髪を惹かれながらも、山容が変わるほど、砲弾が打ち込まれる地へと向かった。今考えると馬鹿げたことであるが、当時は「捕虜になって恥辱を受けるよりは死を」というサムライ精神が支配的であった。また、米兵は鬼畜生で、捕虜になった者の手や耳、鼻等を切り落とし、苦しめてから殺すという悪宣伝がはびこっていた。そういう異常な戦場心理の中で逃避を続けたのであった。怪我して歩けぬ者は自決。逃げる場所を失った家族は集団自決と、陰惨な状況が発生した。無数の死体からわく蛆虫が道路一面に広がり、また、子牛程に膨れ上がった死体が散乱し、草むらに腐敗した死体があるのも知らずに、ブスンと足を踏み込んだりしたが、当たり前の出来事としてその場を去った。喉が渴き、溜め池で水をすくって飲んだ後で、少し離れた所に死体が浮いているのを見ても平気であった。放心状態も手伝い、周囲の現象に馴れこになり、五感も麻痺して、死体が周辺にごろごろしていても、その怖さや異臭も感じなくなっていた。

私達家族は、東へ東へと砲弾の嵐の中を歩き続け、とうとう岩壁の縁まで追い詰められた。二、三十メートルの断崖は、現在では後ずさりする程の場所である。わずかな傾斜を見つけて草木の根を踏みつけながら海岸まで下った。そこにも砲弾は容赦なく打ち込まれた。私達が急ぎ足で岩陰に行く途中、至近距離で砲弾を浴びせられた。これまでも無傷だった弟の繁雄、姉の子供のてる子と舅の佐一が即死。母、姉、妹も重軽傷を負った。こんな形での身内の不幸は初めてで、ただ茫然としてその場に立ちすくんだ。しかし、兄の機敏な誘導で、多少安全な場所に避難することが出来た。兄は三人の死体を海岸近くの一段高い岩陰に葬った。少し落ち着いた頃、私は防衛隊員であり、これから自分の部隊に合流し、北部方面へ海を突破していかなければならない

ことをぼんやりと思いついていた。

「民間人は捕虜になっても大丈夫だと思おう。命だけは大事にして下さい。」と言って母と抱き合った。一人一人と握手を交わしたが、目には涙があふれていた。兄は私に「母を頼む」と強く私の手を握って去って行った。あの寂しそうな後姿、うしろを振り向きながら去って行ったあの姿。これが最後の日になるうとは……。

翌朝は爆撃音は無く、ヘリコプターとグラマンが、低空飛行を繰り返していた。私達は大黒柱の兄と別れ、途方にくれながら三人の亡骸とも別れを告げ、海辺から東へと向かった。母と姉は亡骸のある岩方面を振り向きながら、悲しそうに放心状態で歩いていたが、その姿が哀れだった。しばらく歩いてみると、草木を踏みつぶして出来たにわか道を見つけ、そこから頂上へよじ登った。頂上周辺ではすでに多くの住民が捕虜となっていた。はじめて見る米兵の青い目、無精ひげを生やしたゴツイ兵士のかたまりは異様であった。おどおどしながらも人影から彼らの様子を窺がった。負傷した人々を親切に介抱しているのを見て恐怖は薄らいでいった。住民と日本兵は区別され、私達住民はトラックに乗せられ、知念方面に送られた。私達は志喜屋で降ろされたが、幸いにも母が山里出身だったので親戚が居り、再会と互いの無事を喜び合った。……

平穏な日々を味わいながらも、二、三日前まで元気だった兄や弟を思い出しては一人寂しく泣くことが度々あった。母や姉も身内を失ったショックは大きく私以上にすらかったと思う。……

戦争が終わり平和な時代を迎え、正月やお盆に兄弟同士がお互いに盃を交わす光景を見るたびに、羨ましく寂しさを感じずにはいられない。戦争がなければ自分も楽しい語らいが出来たであろうが、若くして戦争の犠牲になった兄や弟が不憫でならない。五十年以上経過しても兄弟三人を失った戦争に対する憎しみは消えることは無い。これからの世の中は貧しくても平和な社会であってほしい。

戦後50年より各戦跡を巡礼 戦争苦の証言を聞きながら、 追悼と平和の祈願と救援活動を開始 右記の手記は沖繩戦の体験談である。

書かれているように同じ戦争・同じ災害でも状況は各人によって全く異なる。特に地上戦が行われた沖繩、ビルマ戦線、南方の戦線では聞くに堪えない恐ろしい体験が語られる。それを知るならば、戦争は決してしてはならないのである。釈迦の時代ですら、王様を説き伏せて戦争を止めた。今後は、戦争は避けようと考えろ。

訪問地

広島・長崎・水俣
知覧・三机・沖繩
慶良間
韓国・中国成都
マレー半島
ビルマ国境
現地救援
カレン人・四川地震
阪神震災
三陸震災
詳細は [HP//nehan.net](http://nehan.net)



人を差別することは許されないが、実際には差別がある。ところが、これは私の経験であるが、悩み相談をしているときには差別の心は起らない。ホームレスだから敬遠するとか、外国人だから遠ざけるといふことはない。同様に救助隊は、嫌韓嫌中だったりしないどころが、国際救援ともなるともっと頑張ったりする。

人は他人が困っていると助けようとするのである。

さて、釈迦仏陀はなぜ人間皆一緒の平等を説き、いつしよであることを幸福の第一義としたか。

それは、戦争を体験したからに他ならない。人が人を殺す。仏教入門②に詳説したが、海兵隊員でも人間を殺す毎に吐いたり、帰還後に生活不能となったり、戦時を思い出して不眠となり仕事ができず、路頭に自殺したりしている。つまり、人殺しは人間としてできないのである¹⁾。

その戦争を、釈迦は戦闘員として体験する。釈迦は戦士族であり、自ら刃を手にして切りかかるしかなかったのである。そして彼は出家する。理由は、殺されるのが怖かったからではなく、相手の痛みを知ったのである。釈迦は自分自身の中にある人間愛を確認し、それは人の痛みを知ることであった。そして敵は相手にではなく自分にあることを見抜く。自分に突き刺さる見えない矢を発見する。

まず、仏陀は人の痛みを知る。

そして、自分に刺さる煩惱の矢を見抜く。

つぎに、矢を抜く修行をする。

(1) 仏教入門②・海兵隊員アレックスの話

(2) バガバット・ギーター²⁾がアルジュナが敵の中に師匠・父親・息子³⁾が居るのを見てこう言う「彼らが私を殺しても、私は彼らを殺したくない。釈迦も同様の思いではなかったか。国のためという虚偽の正当性に目が曇るときのみ戦闘は可能となることをこの書は示している。

ついに、みんないつしよに暮らしていくこの大切さを身をもって知るのである。その肝要は、

① 人間を分け隔てしないこと。人の痛みを知り、親和すること。

② 戒律を守ること。殺さず奪わずである。

(この①は憲法前文に、②は九条に引き継がれている)

戦争はこの真逆である。どの軍隊も殺し奪う。敵地で疑心暗鬼になればどんどん殺す。そして食料がなくなり奪う。どの証言でも、味方を殺されてめちゃくちゃに手当たり次第殺す(「冬の兵士」など)。私が信頼していたやさしい男性も中国で、食料の徴発に出かけて、民間人を脅し殺している。外国で軍隊が動くということは、泥棒、殺戮、暴力(強姦)が起こるのである。

釈迦は戦争の衝突、いがみ合い、敵視、憎悪の有り様を見た。おそらくその凶暴さは人間に潜むもう一つの欲望であった。釈迦はそれを心臓に突き刺さる矢として捉え、それを抜くことによって、もう一つの本性である人間愛へと立ち戻った。だから何よりも人々が親和することの大切さを肝に銘じた。

釈迦は戒律を守り、少欲知足し、私的所有を少なくし、誰とでも仲よくする共同体を宣揚して、国王からは治外法権を得た。このことは平川先生が細かく論証している。

さて、時は移り、日本国憲法の成立についてである。

この憲法は押し付けであるという議論もあるが、内容をしっかりと見なければならぬ。どう見ても昨今の自民党などが提案している内容より何倍も良いのである。その理由は次である。

① 戦争という人間の罪悪をしつかり踏まえている。(懺悔)

(3) サムユッタ・ニカーヤはスッタニパータに次ぐ古い経典とされるが(中

村元 荒牧典俊先生)、殺し合うこと、ぶつかり合うことが忌避の対象として書かれている。静観仏教とは対照的に、生活苦からの出家、戦争苦からの出家が多々あり、鎌倉仏教もそうであるが、それらの苦を基盤として静観仏教が成立してくると考察される。

② 人類相互の平和への熱意と愛情を誦う。(慈悲と信頼)

③ 不殺人の戒律とも言える戦争放棄を守る。

④ 地上から欠乏と恐怖をなくすことを使命としている。(発心理想)
沖繩戦・広島原爆などの証言にもあるように、戦争ほど苦しく罪深く非仏教的なものはない。これをなくすことは人類の使命である。それを見抜いたのは釈迦仏陀と日本国憲法である。戦争を克服することこそ人類の第一の目的とすべきであるといつても良い。その根底には相互愛がなければならぬ。

戦争というものを知る人こそ人類愛を知る。知れば知るほど、人類愛が満ちてくる。たぶんキリストも苦難の末に愛を説いた。釈迦も戦争体験を通して相互の平等と不殺生と慈悲と共に生きる喜びを身をもって見出した。そしてこの憲法も、大戦争という誠に多くの人々が苦しんだ末に生まれる。大戦後、世界平和がスローガンとなる大きなうねりの中で、敗者も勝者もなく、みんな同じ人間として、この痛みを越えようとして生まれた。だから再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることが真つ先に決意される。この憲法は大戦争の果てに、人類の悲願として書かれた。

そして、戦争克服はどのようにしてなされるかという点、専守防衛と、相互信頼である。

釈迦にとつては、そもそも人類はみんな同じ人間であつたし、戦争を通してよりいつそう皆一緒の親和は強化された。

憲法が基盤とするのもその人間愛である。そして釈迦が見えない矢を抜いてエゴを克服したように、国のエゴを克服するのが各国の国民の相互信頼である。それは基本的な人権とは何かへの深い洞察であり、生まれ、門地、国籍、人種、性別、職業、その他のあらゆる差別的障

碍

④ 石手寺ホームページ /nehan.net/jinsaijizou.html
(5) 日本人が非宗教的であるのは、神仏を信じないからではなく、自分の罪に無頓着であり、精神の向上に関心を寄せないからである。国や国民性の誉れは、自然賛美や祖先賛美からは生まれず、人間の尊厳と美德の習得と崇高な理想保持から生まれるのではないか。

壁を克服する人類の相互愛である。

そして、この見地に立つて、帰結するのが決して殺さないという戦争放棄である。その意味は現下のところ専守防衛である。あらゆる武力の放棄へ到るまではまだ時間を要するであろう。軍隊としての自衛隊に殊更に頼る現政権はどうであろうか。秩序維持なら警察がある。また救援なら消防等の専門家がある。もつと緻密に秩序維持や国際救援を考えるべきである。秘密保護法や武器輸出などを持ち出すのは、人間救援の考え方とは反対方向である。

そして、日本国憲法の最も素晴らしいことは、世界から欠乏と恐怖をなくすために不断の努力をするという宣言である。

欠乏とは飢餓や格差による困窮である。

恐怖とは暴力とか表現への弾圧の恐怖である。

衣食住に困ることなく、言いたいことが言えて、暴力を受けず、人身売買することも無いという理想を、みんなでやろうという、こんな素晴らしい目標を国家国民で持つ。そんな夢の時代の到来を日本国憲法が示している。

この憲法を捨ててはいけぬ。

これは未来の憲法である。

今後ますます広めて輝かせなくてはならない。

このような崇高な理想を懐く憲法の徒であることはまことに誉れである。

それは仏教徒が読経の度に、我らと衆生と皆共に仏道を成ぜんことを願うのと同様である。

われらは、全世界の国民が、

ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、

平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

日本国民は、国家の名譽に
かけ、全力をあげてこの崇
高な理想と目的を達成する
ことを誓ふ。



失えば大過なくして得ることはない
この憲法を失うのは忍びがたい

発行 松山市石手2・9・21

サンガ石手寺 住職加藤俊生

HP // rehan.net

☎ 089-977-0870